

栗南瓜

森岡 正作

曼珠沙華平家の裔と聞けばなほ
根性の座つてゐたる栗南瓜
退屈な正論よりもラ・フランス
曾孫より相撲の好きな生身魂
猪鼻城まづ秋の蚊を迎へ撃つ
模擬天守とや鶏頭の屹立す
空襲の碑にせめてもの柿たわわ

千葉例会吟行三句

稲架立ちて

十月ともなると周辺の田圃は稲がみな刈り取られて、風の色もなく殺風景な感じで物足りない。登四郎先生に「稲架立ちて畦あたらしく匂はしむ」という御句があるが、今は稲架のひとつもない。御句は畦を歩いていると、天日を十分に吸った稲束が甘く匂うようだ、という意味であろう。他に「稲架立ちてよりの夜道を怖れけり」もあるが、稲架のある景はもはや日本の農村の懐かしい風景と言えるのである。

思えば稲架を組み、そして解くのは重労働であり数人の手伝いを要するもので、昭和の大家族ならまだしも、現在の少子高齢化社会における農村の後継ぎ問題を抱えては成り立たない。当然の機械化であるが、稲刈り機を操る人とトラクタで運ぶ人がいればよく、稲穂を大きな乾燥機に入れると三日ほどで新米が出来るのである。少年の頃田圃の手伝いで、畦に座って食べたおむすびの美味しかったことを覚えていたが、あれは稲架から出来たお米だったのである。